

大阪で過去どのような大地震による災害があったのか。文献により検証。

正平16年(1361年)7月24日(太平記)

・摂津の国難波浦の潮が半時ほど急に潮が引きはじめ干上がった後に取り残された魚を拾いに出た人々は、大山の様な津波に呑み込まれ一人として生還しなかった。

・地震の後、雨が激しく降り強風が吹き出して間もなく、難波浦の奥より大きな龍が現れ、天王寺の金堂に入ろうとしたが、四方に光が輝き四天王が現れ壮絶な戦いが続いた。そして二匹の大きな龍が去った時、又大地が激しく揺れ、金堂が木っ端微塵に崩れ落ちた。(上町台地まで津波が来たとは思えないが、泥水が吹き上がったのではない)

・難波浦に何処からともなく大きな桧柱や大木三百本が流れついた。暫く持ち主が現れるかと待っていたが、尋ねくる者もないので崩壊した四天王再建の為に天龍からの授かり物として金堂の用材に使用。



宝永4年(1707年)10月4日(月堂見聞集)

午後2時頃、地震発生。

午後4時、二度揺れる。大阪で破損した回船五百艘余り、茶船上荷船二千四百艘、12日までに確認した死者は15,620人で、殆どが河口や橋より転落し溺死した。橋の損失は36カ所。

安政元年(1854年)6月14日(嘉永6年地震記)

美濃・越前を中心にした福井大地震発生に伴い、大阪でも大きな揺れを感じる。

(大阪市中の道路幅は水帳上は広いが、商家の軒先が互いに一間近く道路に張りだし、軒店・出店・揚店を常設していたので、荷車の往来もままならず、商品の輸送は専ら船に積み替えて処理。→いかにも大阪的。昔から違法駐車ならぬ、違法軒先が大阪の通りを占拠していた)

・翌日の6月15日、天文家が「今晚も地震が揺れる」と予言したとの流言が飛び交い、蔵の商品を守るため大阪中の船が貸し切られたので、川に大小の船が溢れ大混乱した。地震は起こらず避難訓練になったのみ。→福井を震源地とする内陸型地震だったので津波は起こらなかった。

嘉永7年(1854年)11月4日(浪速之震事)

福井地震から半年後、駿河ドラフ地震により、関西一帯で大地震発生・富士山爆発。

午前9時頃、大阪でも揺れ。市中で崩れた家は約90カ所、余震が頻発し、半年前の福井地震に習い人々船に避難。

→現存する大正橋東詰北側の「安政大地震両川口津波記」は、大地震が起こった時は津波が起こると心得、決して船に載るななど、後生の人々に犠牲者の死を無駄にせぬようにとその惨状と下記の様な教訓が記載されている。

- ・地震がゆると家が潰れて出火することもあるので、金銀証文を蔵めて火の用心に努めよ。
- ・川の中に停泊している船は大小にかかわらず、水の勢いが穏やかな所に繋ぐか陸揚げせよ。
- ・津波が起きると地下水脈に異常が起こり、液状化現象で海辺の新田や畑に泥水が吹き出るので注意せよ。

## 嘉永7年(1854年)11月5日(浪速之震事)

午後5時頃、再び大きな地震が発生。6月の地震に習い、荷物を乗せ避難していた大小の船が川に溢れていた。午後9時頃、南西の方向から雷の様な音が鳴り出すと共に大地が揺れだし、人々おおいに驚き怯える。川の水がふえだしたかと思う間もなく6m程の高波が川を駆け上がった。安治川口、木津川口の数千艘の船が一瞬にして内川に押し上げられ、五百石・千石船の大型船も暴走し、前日より地震を避けて一般の人々が乗り込んでいた小舟をはねのけ、下敷きにし大破させ、橋の上で様子を見ていた者までを巻き込む、溺死する人数えきれず。潮はすさまじい勢いで川を引き戻し、人や船や建物を川下へさらっていった。その為、川沿いの建物や土蔵、納屋に船が飛び込むなどし、津波が去った跡一帯に船の残骸が残り、人々の死骸が至る所を埋め尽くした。

→死者数千人。破損した船は1118艘、多数の橋が崩壊した。流出した荷物無数、損害額は莫大。

## 総括

現在懸念されている東海沖大地震がもし発生したら、過去の文献から推測すると太平洋のプレートが連動して動き南海沖大地震を誘発する可能性が大きいので、大阪にいるからと安心できない。宝永・安政地震で見られる様に、太平洋で巨大地震が発生すると津波は、紀伊水道を上がり大阪湾に入る。津波は湾内で一番きつく、大阪は三角形の奥に位置しているので、津波集中度がもっとも高い地形である事を忘れてはいけない。事実、過去二度にわたり大阪は津波地震に襲われ、多くの犠牲者が出ている。

もし今、南海沖で地震が発生した場合、関西新空港や天保山などベイエリア開発により乱立する臨海ビル郡の安全性が課題になり、川が埋めたてられ都市化した大阪の町は予想だに出来ない未曾有の被害が起こるだろう。大津波は地震発生後、1時間から2時間たって起こっている。地震後浜に魚が取り残される程の引き潮現象が起これば、かなり大きな津波が発生するものと注意する必要がある。

過去の文献で予想すると、ほぼ150年周期で津波地震が発生しているので、次は2004年プラスマイナス10年の間は危険性が高いと思われる。

・阪神大震災は直下型地震によるものだが、京都の直下型地震の被害状況も文献に残っている。文禄5年(1596年)閏7月12日(出典:言経卿記)、寛文2年(1662年)5月1日(出典:玉露業)、文政13年(1830年)7月2日(出典:三河屋金次郎見聞次第)に、地震が起こりかなりの寺院が倒壊し、多くの犠牲者が出たことを詳しく列記している。文献から推測して、京都の直下型地震は、ほぼ170年周期で次は2000年頃、京都から大津への直下型地震の危険性が高い。

## 雑感

一度天災が起こった時、そこに人知を超えた災害が発生することを阪神・淡路大震災が実証した。天災は、忘れた時にやってくる。今日と同じ明日が来るとは限らない。ましてや、人間はここは俺の土地、俺の家だと人間の都合だけで山野を切り開き川を埋めたて、自然にも何百年に一度地殻変動を起こすという自然の都合がある事を忘れていた。少しばかりの文明という知恵を手にして傲慢に俺の土地だと人間が主張したところで、自然には通じない。自然の一部として、人間がどう生きていくか。真剣に考えなくてはならない限界に来ていると痛感させられた。更に、犠牲者を弔う意味でも過去の史実が、どれだけ教訓として現代社会に活かされているだろうか。大阪での過去二度にわたる大規模な津波地震の事についても、私を含め参加者の殆どが知らなかった。伊勢戸先生のから過去の惨状を聞いている間に、今同じ規模の津波地震が大阪を襲ったらと想像するだけで鳥肌がたった。地震が来るか、未知数の明日に幸せを求めるのではなく、今この瞬間に幸せがあるはず……。教訓という言葉の重みをずっしりと感じた。(原田彰子)